

論 説

スペイン内戦を死亡広告から考える ——カトリック的青年層の個人史再考の試み——

渡 邊 千 秋*

はじめに

スペイン現代史研究に大きな足跡を残したハビエル・トゥセル¹⁾は、内戦研究に言及して、「歴史を内部から叙述すると、歴史というよりは防御や侮辱、賛美もしくは攻撃になる傾向が強い。より妥当なところで言っても、記憶とは、自分が居合わせた場所から自分の眼で見ることができた人間が語る、ある個人の思い出でしかない。だから記憶が真実で想像の産物ではないときには、記憶自体は歴史ではなく、歴史のための部品なのである。記憶とは、歴史家が自分の職業的知識と個人的理解とを駆使して検討し、学び、組み立てていくためのものだ。」²⁾と述べている。

それでは、歴史家はどのような記憶を検討するに値する研究対象にするべきなのだろうか。特にスペイン内戦(1936-1939)という、スペイン人の内部にいままだ残存する「傷あと」を正確に叙述するためには、事実を事実の外側にたっ

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

- 1) ハビエル・トゥセル(1945-2005)はスペイン国立放送大学(Universidad Nacional de Educación a Distancia: UNED)の地理・歴史学部現代史学科の教授であった。専門はスペイン現代政治史。社会学的手法を駆使し、第二共和政期マドリードの選挙結果分析を行った研究で認められ、その後は20世紀全体を網羅する精力的な研究活動を行った。日刊紙『エル・バイース』の論客としても知られた。
- 2) Tusell, Xavier (ed.), *ABC, 1936-1939. Doble diario de la Guerra Civil. Madrid-Sevilla. 19 de julio a 2 de agosto de 1936*, Madrid, Editorial Prensa Española, 1978, p. 5. なおここでは「記憶」と訳出しているが、原文では記憶は複数形(memorias)で記されていることも言い添えておきたい。

てできるかぎり客観的に検討する必要がある。これまでに出版されたスペイン内戦に関する研究書は膨大な数にのぼるが、その多くが結果的に、フランコ陣営もしくは共和国陣営のどちらかを支持する立場に立って書かれているのも事実である。例えば、本稿でとりあげるカトリック的な青年平信徒は、フランコ軍陣営の人間である、という型に集約され、その複雑な実相に言及されることは稀である。しかしフランコ軍と共和国軍とを「善」と「悪」もしくは「悪」と「善」に分類する二項対立的な図式では、フランコ軍側で戦ったカトリック青年信徒の心性にみられる葛藤はもとより、積極的なカトリック青年平信徒でありながら共和国軍を支持した人々がいたことや、また、偶然にも内戦勃発時に共和国陣営内にいたため共和国軍に召集されて戦闘に向かった青年平信徒など³⁾、構図から外れる人々の歩みは歴史の蚊帳の外に置かれてしまう。このように、紋切り型の再生産を許容する姿勢は、内戦の現実を把握しようとする試みを困難に陥れているといえよう。

それぞれの陣営にとっての「正しい」戦争をあらためて描く神話は必要あるまい。本稿では叙述の対象を個人の歩みにおろしてスペイン内戦を考えてみたいと思う。

1. 個人史を再構築するために：新聞における死亡広告の位置づけ

注目したのは、アクション・カトリカ青年部に所属していた青年たちの内戦下での行動である。教皇庁の指導のもとに1920年代に開花し、第二共和政期(1931-1936)の反教権的政策に対して反旗を翻したアクション・カトリカ青年部は、まさにこの共和政期にメンバーの政治化を経験した。右派に限定されてはいたが、多元的な政治活動を行っていたメンバーが多数いたため、第二共和政期・内戦期においては、アクション・カトリカ青年部のメンバーであるということは、共和国の敵であると同義に捉えられたのであった。

3) 両陣営のどちらの側にも立たなかった「第3のスペイン」については、特に以下の文献を参照されたい。Raguer, Hilari, *La pólvora y el incienso. La Iglesia y la Guerra Civil española (1936-1939)*, Barcelona, Península, 2001, pp. 275-320.

1936年7月の内戦勃発以降、共和国軍に招集されたもの、共和国陣営内で息を潜めてフランコ陣営への逃亡の機会をうかがいながら過ごしたもの、フランコ軍に後衛から協力したもの、前線に自ら進んで兵士として向かったもの、など、アクション・カトリカ青年部のメンバーのたどった足跡は様々であった。

本稿では、内戦下で死亡したメンバーに関して、まずは新聞における死亡広告を利用して、彼らの周辺の人々による記録から死者の人生を再構築した後に、その他の史料を使用して情報を補完しつつ、より正確な個人史の記述を目指す。

なぜ死亡したメンバーに特化するのかといえば、内戦を生きのびたメンバーは、一般に、自分の経験を深くは語らなかつたといえるからである。フランコ軍の出した「結果」を正当化する発言はあっても、それを自分自身のものとして細部に至るまで客観視することは、実際には困難であつたのであろう。他方、死亡したメンバーの足跡は、彼らを記憶していた当時の人々によって記録され、当時の言葉で語られている。たとえば、本稿で使用する死亡広告は、多くの場合、内戦勃発直後にフランコ軍側の支配下にあつた地域では死亡が確認された直後に、またフランコ軍が共和国軍の支配領域を掌握した直後にその掲載が見られる。まだ「熱のさめやらない」中での言葉遣いには、死者への深い感情が秘められており、小さなスペースであるにもかかわらず、死者の短かつた人生の足跡が重みをもって記されている。そこには、死が日常に蔓延する世界で、死亡したメンバーの人生を改めて思い返し、記録し、かつ祈念することによって、近いものの死を受容しよう、しなければならない、とする関係者の苦悩が見え隠れするのである。

また現代にも共通することではあるが、死亡広告は必ずしも家族が出すものであるとは限らない。死者と交流のあつた家族以外の人々が掲載する場合も多く見られる。そして家族による死亡広告と家族以外の人々による死亡広告の情報の質・量・そして言葉遣いの間には、同じ死者を対象として書かれているにもかかわらず、明らかな差異がみられる場合が多い。そしてこの差異こそが、メンバーの人生の歩みを把握する上で非常に有益に機能しているのである。

それでは以下、例として3名の死亡広告をみてみよう。

2. 死亡広告から個人の歩みをどう読み解くことができるのか？

2-1. アントニオ・アルバレス・エスパラゴ (Antonio Álvarez Espárrago, 1915-1938) の死亡広告から

まず、アントニオ・アルバレス・エスパラゴという人物に関して、エストレマドゥーラ地方バダホスの日刊紙『今日 (Hoy)』に掲載された死亡広告を考察してみよう。この新聞は、内戦直前まで日刊紙『討論 (El Debate)』をマドリードで出版していたカトリック出版社の傘下にあった。カトリック出版社自体は、フランコ陣営の国家技術評議会により、1936年11月、「新国家」建設を担う出版社のひとつとなるように再編された。しかし再編された役員会の中心人物たちはアルフォンソ王党派であり⁴⁾、再編後の日刊紙『今日』の編集に関しては、ファランヘや伝統主義者の影響が及ぶのを極力回避しようとした⁵⁾。そうして、日刊紙はその特色であったカトリック的要素を維持し続けたのであった。

黒い縁取りの目立つ死亡広告は、まず家族(死亡広告①)と職場の同僚(死亡広告②)とによって掲載されたと考えることができる⁶⁾。

死亡広告 ①

「アントニオ・アルバレス・エスパラゴ。聖ルイス・ゴンサガ信徒会員。レヒオン少尉。アルカラ・ラ・レアルの前線で1938年4月2日、23歳で、聖なる秘蹟を受けた後、宗教と祖国を守り死亡した。安らかに憩わんことを。彼の両親、父フロレンシオ・アルバレス・サンチェスと母パウラ・エスパラゴ・フェルナンデス、エスパラゴの未亡人である祖母カルメン・フェルナンデス、兄弟、叔父叔母、その他家族は、彼の旧交に対して、彼の魂のために祈ってくれるよう、また7日の朝11時に聖アグスティン教会で行われる葬儀と8日の8時30分にアルブルケケの聖マテオ教区教会で行われるミサへの参列を願っている。セビーリヤ大司教、バダホス司教、ビゴ司教は習慣のとおり贖宥を認可する。』⁷⁾

4) Andrés-Gallego, José, *¿Fascismo o Estado católico? Ideología, religión y censura en la España de Franco, 1937-1941*, Madrid, Encuentro, 1997, pp. 93-94.

5) Escribano Hernández, Julio, *Pedro Sainz Rodríguez, de la monarquía a la república*, Madrid, Fundación Universitaria Española, 1998, p. 305.

6) 以下、使用した死亡広告等全てに通し番号をつける。

この家族による死亡広告①には、まずはじめに、アルバレス・エスパラゴはイエズス会が16世紀に創設したマリア信徒会の少年部門である聖ルイス・ゴンサガ信徒会という団体で幼いころから宗教的人格形成を受けていたことが記されている。

この聖ルイス・ゴンサガ信徒会会員としての記述の後に、死亡時にはレヒオンという精鋭部隊の少尉であったという、フランコ軍内部での地位が記される。これに宗教と祖国防衛のためにアルカラ・ラ・レアルというアンダルシア地方グラナダ近くの前線で死亡したという記述が続く。ここでいう宗教は大文字で記されており、当然のことながらローマ・カトリックを指している。

またバダホスとアルブルケルケの2つの街で葬儀・追悼ミサが執り行われていることから、この地域にアルバレス・エスパラゴの通常の行動範囲があり、家族や親しい友人・知人がいたであろうことがわかる。また人々が彼の死を祈念することで贖宥をうけられるようにするなど、父・母・母方の祖母・叔父叔母等彼の家族は、カトリック式の葬儀の伝統的形態を踏襲したうえで死亡広告を出しており、日常生活・習慣のなかでカトリック教会とのつながりを密接に持つ家庭でアルバレス・エスパラゴが育ったことが理解できる。

家族による死亡広告①が掲載されたのは1938年4月6日だった。アルバレス・エスパラゴの戦死から数えて5日で死亡広告が出された事実は、フランコ陣営内では前衛から後衛への連絡網がしっかり機能していたことを物語る。

死亡広告②

「レヒオンの少尉。アントニオ・アルバレス・エスパラゴ氏。ビルバオ銀

7) *Hoy*, núm. 1727, 6 de abril de 1938, p. 4. "Antonio Álvarez Espárrago. Congregante de San Luis Gonzaga. Alférez de la Legión. Murió en defensa de la Religión y de la Patria en el frente de Alcalá la Real el día 2 de abril de 1938, a los 23 años de edad, después de recibir todos los Santos Sacramentos. R.I.P. Sus padres don Florencio Álvarez Sánchez y doña Paula Espárrago Fernández; su abuela doña Carmen Fernández, viuda de Espárrago; hermanos, tíos y demás familia, Ruegan a sus amistades una oración por su alma y asistan al funeral que se celebrará en la iglesia de San Agustín el día 7, a las once de la mañana y en Alburquerque el día 8, la misa de las ocho y media, en la parroquia de San Mateo. El arzobispo de Sevilla, obispos de Badajoz y Vigo conceden indulgencia en la forma acostumbrada."

行行員。今月2日に神と祖国のために死亡した。安らかに憩わんことを。ビルバオ銀行取締役会、バダホス支社執行部、そして同僚一同は彼の魂のために祈ってくれるように願う。バダホス、1938年4月。』⁸⁾

死亡広告②には、家族が出した死亡広告①にはない点、つまりアルバレス・エスパラゴの社会層が反映されている。彼は出征以前にはビルバオ銀行バダホス支店に勤務していた。ビルバオ銀行とは、現在のスペインの有力銀行であるビルバオ・ビスカヤ・アルヘンタリア銀行のもととなった3銀行のうちの1行である。弱冠23歳の人間に対し、形式であるとはいえ取締役会や同僚が哀悼の意を表していることから、支店内では少なからず将来を嘱望された人物であったと想像できる。

通常と状況が多少異なるのは、これら①・②の死亡広告のみでアルバレス・エスパラゴへの追悼が終わらないということである。死亡広告が掲載された翌日の1938年4月7日、別途、次に示す署名入りの追悼記事が『今日』に掲載された(追悼記事③)。

追悼記事③

「レヒオンの少尉、同志アントニオ・アルバレス・エスパラゴ、ここにあり！ ファランへにおける最大の任務を果たした古参の同志アントニオ・アルバレス・エスパラゴよ、ナショナルサンディカリスト革命の夜明けを君と分かち合い、君の向こう見ずともいえる度胸と、楽観主義と、明るく飾らない性格を知っているわれわれは、われわれの魂の奥底で、あまりにも手が震えてペンを握り書くことができないほどに、君の戦死を知って、感動しているのだ。君と分かち合った時間をもたらず親近感と仲間意識とがわれわれの視線を曇らせるが、しかし広く強い心は君の英雄的な死、まったく無欲な人生の荘厳なフィナーレを知って誇りに思う、

8) *Hoy*, núm. 1727, 6 de abril de 1938, p. 4. "El alférez de la Legión. Don Antonio Alvarez Espárrago. Empleado del Banco de Bilbao. Ha muerto por Dios y por la Patria el día 2 del actual. R.I.P. El Consejo de Administración del Banco de Bilbao; la Dirección de la Sucursal de Badajoz y sus compañeros, Ruegan una oración por su alma. Badajoz, abril 1938."

君は、青いシャツとともに一度ならず栄光に満ちた血がしみこんだレヒオンの栄光に満ちた制服を着て、スペインのために奉仕し犠牲を払うという聖なる兄弟愛で、二つの勢力が常にお互いに親密に浸透していることを示したのだ。君に向かって名誉の叫びをあげるにあたり、われわれは魂の底から、心からの気持ちでそうする、われわれの胸の内の全ての力で、君のご両親の気持ちに寄り添い甘い甘酸っぱい味の涙とともに、また親しい同志の永遠の思い出に溢れ、感動的で男性的でエネルギー的なスペインよ、立て！を叫ぼう。レヒオンの少尉、同志アントニオ・アルバレス・エスパラゴ、ここにあり！フェリックス・サルディーニャ。』⁹⁾

この追悼記事③を書いたサルディーニャはファランへのバダホス支部長であり、内戦後もファランへでの活動を続けた人物であった。そのような人物から「同志 (camarada)」と呼ばれていることや、記述にファランへのシンボルでもある青いシャツへの言及があることなど、アルバレス・エスパラゴが古参のファランへ党員であったことは明白である。そこから、当時の青年の心性としては、伝統的なカトリックの信仰と、ファシスト的要素をもつファランへのイデオロギーへの共鳴とが共存しえたと見ることができる。また精鋭部隊レヒオンに所属しての参戦は、ファランへであるアルバレス・エスパラゴにとっての

9) *Hoy*, núm. 1728, 7 de abril de 1938, p. 4. “Alférez de la Legión, camarada Antonio Alvarez Espárrago, ¡Presente! Un camarada de la Vieja Guardia cumple el servicio máximo de la Falange, Antonio Alvarez Espárrago, los que compartimos contigo los albores de la Revolución Nacionalsindicalista, los que sabemos de tu valor temerario, de tu optimismo, de tu carácter alegre y sencillo, sentimos en lo profundo de nuestra alma una emoción tan grande al conocer tu caída que la pluma se resiste a escribir por el temblor de nuestra mano. El cariño y la camaradería que dan las horas compartidas contigo nublan nuestra vista, pero el corazón ancho y fuerte siente el orgullo de saber de tu muerte heroica, digno colofón de una vida plena de desprendimientos, vistiendo el uniforme glorioso de la Legión, que una vez mas se empapaba de sangre gloriosa junto con la camisa azul, y demuestra la íntima compenetración de dos fuerzas unidas siempre en santa Hermandad de servicio y sacrificio por España. Al darte nuestro grito de honor lo hacemos con toda la emoción de nuestra alma, con toda la fuerza de nuestro pecho, con el sabor agridulce de una lágrima que unimos a la de tus padres y con un ¡Arriba España! viril enérgico, pleno de emoción y de recuerdo imperecedero hacia el camarada entrañable. Alférez de la Legión, camarada Antonio Alvarez Espárrago: ¡Presente! Félix Sardiña.”

政治的理想と矛盾するものではなかったようである。追悼記事③はファランへとレヒオン、二つの勢力の融合を象徴する存在として活躍し、死を通じて最終的に祖国スペインへ奉仕した人間としてアルバレス・エスパラゴを捉えなおしている。文脈からは、息子を失った両親への同情も読み取れるが、血への言及や「スペインよ、立て!」といった敬礼を用いつつ、死者をファランへの中で英雄視し、その死を名誉ある戦死として強く称えていることに注目すべきであろう。

その後も死亡広告の掲載は続いた。次に挙げるのは、死亡した会員を追悼して聖ルイス・ゴンサガ信徒会自体が日刊紙『今日』に出したと思われる死亡広告である(死亡広告④)。なお、アルバレス・エスパラゴの死後2ヶ月あまりが経過した1938年6月に掲載されている。

死亡広告④

「バダホスの聖ルイス・ゴンサガ信徒会会員、神と祖国のために戦死した者たちよ、ここにあり! アントニオ・アルバレス・エスパラゴ、レヒオンの少尉、神とスペインのため、アルカラ・ラ・レアルにおいて、1938年4月2日に23歳で栄光のうちに死亡。」¹⁰⁾

実は、この死亡広告は、それまでに死亡が確認された複数の信徒会会員のうちの一人としてアルバレス・エスパラゴを捉えたものだ。また死亡広告①や死亡広告②には見られないが、追悼記事③には見られる「ここにあり! (¡Presente!)」という表現があり、この点から、信徒会がその会員に要求する「よきカトリック」であるということと、公民的で軍事的な表現として現れるファランへのイデオロギーとが、アルバレス・エスパラゴ本人のみならず、この死亡広告を掲載した信徒会の人間にも共有されていたことがわかる。

アルバレス・エスパラゴに関する記述は、彼が死亡した1938年4月の周辺

10) *Hoy*, núm. 1794, 21 de junio de 1938, p. 3. “Congregantes de San Luis Gonzaga de Badajoz, caídos por Dios y por la Patria. ¡Presentes! Antonio Alvarez Espárrago, alférez de la Legión, muerto gloriosamente por Dios y por España en Alcalá la Real, a los veintitrés años de edad, el día 2 de abril de 1938.”

にのみ見られたわけではない。死者を記憶するプロセスは時間が経過しても継続していた。1年後、家族によって再び死亡広告が掲載されたのである（死亡広告⑤）。

死亡広告⑤

「一周年。アントニオ・アルバレス・エスパラゴ氏。レヒオンの臨時少尉。ビルバオ銀行行員。1938年4月2日、23歳で、聖なる秘蹟を受けた後、アルカラ・ラ・レアル（ハエン）の前線で宗教と祖国を守り死亡した。安らかに憩わんことを。彼の両親、父フロレンシオ・アルバレス・サンチェスと母パウラ・エスパラゴ・フェルナンデス、祖母カルメン・フェルナンデス、兄弟、叔父叔母、従兄弟他家族は、彼のために祈ってくれるよう願う。コンセプション教会で執り行われる4月1日の朝8時から10時にかけてのミサは彼の魂の永遠の休息のためにあてられる。セビーリャ大司教、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大司教バダホス司教、マドリード・アルカラ司教によって習慣のとおり贖宥が認可された。」¹¹⁾

死亡広告⑤は家族によって掲載されたものである。基本的には1年前の死亡時の広告内容を踏襲しているが、いくつか加筆・修正した点がある。時の経過がより詳細な情報を提供する環境を整えたと考えらるべきであろう。まず軍人としてのアルバレス・エスパラゴの階級について、「少尉」から「臨時少尉」に修正した。ついでビルバオ銀行に勤務していたことを明示し、社会的な地位にも言及した。また追悼する家族のメンバーとして「いとこ」を付け加えている。追悼ミサは葬儀の折の場所とは異なるコンセプション教会というところで執り

11) *Hoy*, núm. 2035, 21 de marzo de 1939, p. 2. “Primer Aniversario. Don Antonio Alvarez Espárrago. Alférez Provisional de la Legión. Empleado del Banco de Bilbao. Murió en defensa de la Religión y de la Patria en el frente de Alcalá la Real (Jaén) el día 2 de abril de 1938, a los 23 años de edad, después de recibir los Santos Sacramentos. R.I.P. Sus padres don Florencio Alvarez Sánchez y doña Paula Espárrago Fernández; su abuela doña Carmen Fernández; hermanos, tíos, primos y demás familia, Ruegan a sus amistades le tengan presente en sus oraciones. Las misas que se celebren el día 1 de abril, de ocho a diez, en la iglesia de la Concepción, serán aplicadas por el eterno descanso de su alma. El eminentísimo señor Cardenal Arzobispo de Sevilla, excelentísimos señores Arzobispo de Santiago de Compostela, Obispos de Badajoz y Madrid-Alcalá, se han dignado conceder indulgencias en la forma acostumbrada.”

行われている。贖宥を出した高位聖職者たちも、セビーリャ大司教を除いて全て入れ替わっている。

2-2. アントニオ・アルバレス・エスパラゴの内戦下の歩みを補完するために
二つの陣営それぞれが自己の正当性を主張し、戦闘が進展する中で、フランコ軍の司令部を深く悩ませたのは、将校としての人材が不足していることであり、それを補うために設けられたのが臨時少尉という階級だった。そこで、職業軍人ではないが、分別があり判断力に優れた青年、したがってその多くの場合は高学歴を伴った青年を、短期間での軍事教練を通じて教育しなおしたのである。アルバレス・エスパラゴもそのような短期間の訓練を受けて戦場におもむいた臨時少尉の一人であった。

死亡時から逆算すると、アルバレス・エスパラゴは1915年生まれ。銀行に就職していたことから、職業軍人でなかったことは明らかである。兵役開始時の記録が現在までのところ見つかっていないため、彼がフランコ軍に加わった折の詳細は不明である。しかし軍の史料館が部分的に保管する個人記録から、死亡広告が言及しているレヒオンに所属する以前に、彼は南軍内の第33カディス歩兵連隊に所属していたことがわかっている。前述の第33カディス歩兵連隊が属する第3方面軍(南軍)第33師団は1937年5月に編成されたが、同年6月には第32師団として再編成されている¹²⁾。アルバレス・エスパラゴは、おそらくこの再編下で、積極的に前線に行くことを求めてレヒオンに移ったと思われる¹³⁾。レヒオンの司令部からサラマンカの総司令部へ送られた1937年8月28日付の書簡では、アルバレス・エスパラゴは既にレヒオン第11大隊で活躍しており既成事実ができているのだから、その地位を正式のものとするため

12) Engel Masoliver, Carlos, *Historia de las Divisiones del ejército nacional, 1936-1939*, Madrid, Almena, 2000, pp. 78-81.

13) スペイン内戦下のフランコ軍将校リストを部隊ごとに再編した研究書の第33カディス歩兵連隊の箇所にも、アルバレス・エスパラゴの名前を見つけることはできない。Id., *El cuerpo de oficiales en la Guerra de España*, Valladolid, AF Editores, 2008, pp. 405-407.

に『官報』に掲載してほしいとの依頼がなされている¹⁴⁾。この要望は即刻認められ¹⁵⁾、その後、彼は死亡時までレヒオンに所属した。

このときから少しさかのぼるが、1937年4月には政党統一令が出され、フランコ軍陣営における唯一の党である「伝統主義と JONS のスペイン・ファランヘ」が結成された¹⁶⁾。既に1936年末から始まっていたファランヘの民兵や伝統主義者(カルリスタ)の民兵のフランコ「正規」軍への統合が、この統一令によって可視化されたのである。そして、フランコ陣営側は、総司令官フランコのもとで一致団結して共和国軍を敗北に追い込むため、全体の士気を高めようとした。そのような状況下にあつて、アルバレス・エスパラゴの心中に、ファランヘのリーダー、ホセ・アントニオ・プリモ・デ・リベラに対して忠誠を誓った古参のファランヘとしてのアイデンティティと軍隊内での自らの地位を考えて、葛藤が生まれた可能性は否めない¹⁷⁾。

その後、レヒオン第11大隊の第41中隊に所属したアルバレス・エスパラゴは、1938年3月28日、アンダルシア地方のアルカラ・ラ・レアル付近で右胸に敵弾を受けて重傷を負い、死亡した。遺体はグラナダの市営墓地に移され、またカンピーリョの戸籍簿には死亡が登録されている¹⁸⁾。

14) Archivo General Militar de Segovia (AGMS). Sección GU, Legajo A-177. Carta del General Jefe de la Legión al General Jefe del Ejército Español, con la fecha del 28 de agosto de 1937.

15) AGMS. Sección GU, Legajo A-177. Telegrama Postal del Cuartel General del Generalísimo al General Jefe de la Secretaría de Guerra, con la fecha del 2 de septiembre de 1937.

16) この統一令は、結果的には伝統主義者(カルリスタ)にとっては実質的にファランヘへの吸収を意味した。伝統主義者のなかには抵抗し、ファランヘと争う姿勢を見せたものもいるが、現実的なものたちは、軍や統一後の党内における自分たちの地位を上げる路線を選択したのである。Cf. Peñas Bernaldo de Quirós, Juan Carlos, *El carlismo, la república y la Guerra Civil (1936-1937). De la conspiración a la Unificación*, Madrid, Actas, 1996, pp. 304-305.

17) ファランヘの中でも、政治的によいポジションを得ようとするなら、統一後の「純粋な」ファランヘとして、フランコへの指示を明確にする必要があつた。Gil Pecharrmán, Julio, *Con permisos de la autoridad. La España de Franco (1939-1975)*, Madrid, Temas de Hoy, 2008, pp. 31-32.

18) AGMS. Sección GU, Legajo A-177. Certificado de las Diligencias, con la fecha del 20 de mayo de 1938.

ここまではフランコ軍で積極的に戦った、血気盛んな青年の例を挙げた。しかし、アクション・カトリカ青年部のメンバーの運命は、内戦勃発時にそれぞれが偶然遭遇した環境によって大きく異なった。共和国軍の支配下にあつて、共和国軍へ協力した人間もいる。次に挙げる例は、そのような消極的協力者に対する共和国側の弾圧を物語るものである。北部カンタブリア地方の中心都市サンタンデルで発刊されていた『日刊サンタンデル (*El Diario Montañés*)』¹⁹⁾の死亡広告の一例をみよう。

2-3. フェルナンド・バルセナ・コルテス (Fernando Bárcena Cortés, 1914-1937) の死亡広告から

死亡広告 ⑥

「青年フェルナンド・バルセナ・コルテス。サン・ロマン・デ・ラ・リャニーリャのカトリック青年会に所属。神と愛する祖国スペインのため、1937年1月1日、24歳で、バスクネス・デ・エプロにおいてマルクス主義者の暴徒らによってあさましくも殺害された。安らかに憩わんことを。悲しみに満ちた彼の両親、父ラモン・バルセナと母マリア・コルテス、姉妹マリア・デル・カルメン、マリア・デル・マル、コンセプシオン、母方の祖母エンカルナシオン・アニエバス、叔父叔母、従兄弟、その他の家族は生前の友情に対して彼の魂のための祈りを捧げてくれるように、また明日月曜午後4時に行われるサン・ロマン・デ・ラ・リャニーリャにおけるファランへの施設から村の墓地までの遺体の移送への参列を願う。家族は参列に感謝するであろう。サン・ロマン・デ・ラ・リャニーリャ、1937年10月10日。勝利の二年目。フランコに敬礼。スペインよ立て！」²⁰⁾

19) 『日刊サンタンデル』は1901年に創立された新聞である。カトリック教会の方針に合致したいわゆる「よき新聞」であった。Cueva, Julio de la, “Chapter 9. The Assault of the city of Levites: Spain”, en Clark, C., Kaiser, W., (eds.) *Culture Wars. Secular-Catholic Conflict in Nineteenth Century Europe*, Cambridge, Cambridge University Press, 2003, p. 200.

20) *El Diario Montañés*, núm.11241, 10 de octubre de 1937, p. 1. “El Joven Fernando Bárcena Cortés. Perteneciente a la Juventud Católica de San Román de la Llanilla. Murió por Dios y por España, su querida Patria, vilmente asesinado por las hordas marxistas, el día primero de enero de 1937 en el pueblo de Báscones de Ebro, a los

このバルセナ・コルテスという青年平信徒についての死亡広告⑥は、前述のアルバレス・エスパラゴの死亡広告①と同様に、家族の依頼によって出されたものである。明らかな違いはバルセナ・コルテスがマルクス主義者によって殺された、と明記されている点である。「マルクス主義者の暴徒らによってあさましくも殺害された」という表現には、死者への哀悼と彼の不条理な死に対する憤りの感情が見られるが、またこの表現は、フランコ軍陣営側の人間で共和国軍陣営側に殺害されたと考えられた人物の死亡広告では多用された形式であることも念頭に置く必要がある。

また実際の死亡から死亡広告がでるまでの10ヶ月の空白は、北部戦線での戦闘の進展のようす、つまりカンタブリア地方が共和国軍陣営の支配領域からフランコ軍陣営の支配領域に入るまでの時間の流れを如実に物語っている。フランコ軍による「解放」後の数ヶ月間の同新聞は、連日、死者を追悼するための大量の死亡広告で溢れている。サンタンデルの陥落は1937年8月末であるので、バルセナ・コルテスのケースでは、「解放」後の情報が錯綜する混乱期を経て、遺体を家族のもとに戻すための手続きが終わり、死亡広告が掲載されたとみてよいであろう。

死亡広告⑥の冒頭では、バルセナ・コルテスがアクション・カトリカ青年部へ所属していたことを示す言及がある²¹⁾。誰もが目にとめる冒頭部での言及であることから、バルセナ・コルテスがアクション・カトリカ青年部で受けたカトリック的な人格形成教育は、地域社会で受容されていたと考えるべきであ

24 años de edad. R.I.P. Sus desconsolados padres, don Ramón Bárcena y doña María Cortés; hermanas María del Carmen, María del Mar y Concepción; abuela materna doña Encarnación Anievas; tios, primos y demás familiares, Ruegan a sus amistades una oración por su alma y asistan a la conducción del cadáver que se verificará mañana lunes, a las cuatro de la tarde, desde el local de Falange de San Román de la Llanilla al cementerio de dicho pueblo, por cuyos favores quedarán agradecidos. San Román de la Llanilla, 10 de octubre de 1937. II Año Triunfal. Saludo a Franco. ¡Arriba España!

21) バルセナ・コルテスがアクション・カトリカ青年部のメンバーであった事實は、青年部機関紙『しるし (Signo)』に掲載された以下の記事によって証明できる。Signo, núm.20, 13 de marzo de 1938, p. 2; *Ibid.*, núm.29, 25 de julio de 1938, p. 10.

る。それに対して、本稿 2-1 で述べたアルバレス・エスパラゴの死亡広告 ① ではアクション・カトリカ青年部への言及はみられないのはなぜか²²⁾。その背景には、宗教的組織と政治的組織との間の対立が考えられる。アルバレス・エスパラゴの日常の行動が、ファランへに所属することによって必然的に深い政治性を帯びていたであろうことは十分に想像の範囲内であるのだが、このような個人の政治化は、組織の非政治性を謳ったアクション・カトリカ青年部の理念と矛盾する、という点を指摘しておきたい²³⁾。

他方、死亡広告 ⑥ でのバルセナ・コルテスの遺体の移送についての言及にも注目されたい。ここでは、ファランへの施設から墓地まで、と移動範囲が定められており、バルセナ・コルテス自身がファランへに所属していたかは明確ではないが、死者への礼拝に地域のファランへが深く関与していたことは明らかである。また、こういった「野辺送り」は、死者の家族とは関係のない市井の人々に対しても、共和国軍の行いを視覚的に知らしめる役割、つまり改めて共和国軍への敵意を鼓舞するためのプロパガンダの役割を果たしたとも言える。宗教的事象と政治的事象との結びつきの深さを、またそれら二つを線引きして分離することがいかに困難であるかを端的に示す一例であろう。

追悼記事 ⑦

「我々の殉教者のギャラリー。神と祖国のために死んだ戦死者。フェルナンド・バルセナ・コルテス氏。サン・ロマン・デ・ラ・リャニーリャに 1914 年 7 月 24 日に生まれる。13 歳から 18 歳までコルバン（サンタンデール）の神学校で学んだことが実を結んだ。所属する 34 年の新兵グループが召集されると、物理的な兵役免除によって、ある事務所で奉仕活動を行った。しかしファシストであるという非難によって告発されたため、ベニト・ゴンサレス大尉が指揮を取る工兵大隊へと配置転換になっ

22) 以下の文献では、アルバレス・エスパラゴが確かにアクション・カトリカ青年部のメンバーであったことを証明する記述を見ることができる。Signo, núm. 40, 8 de enero de 1939, p. 2.

23) アクション・カトリカ青年部の政治性をめぐる問題については以下の文献を参考にされたい。Watanabe, Chiaki, *La confesionalidad católica y la militancia política: La Asociación Católica Nacional de Propagandistas y la Juventud Católica en España (1923-1936)*, Madrid, UNED, 2003.

た。この大隊はサンタンデルから1936年11月にビリャヌエバ・デ・ラ・ニアにむけて出発し、フェルナンドは殺害された1月2日まで、そこに留まった。]²⁴⁾

追悼記事⑦は『日刊サンタンデル』に掲載された「我々の殉教者のギャラリー」というカンタブリア地方出身の戦争犠牲者に関する一連の伝記シリーズで取り上げられた。1938年2月に掲載されている。

ここでは、新聞の連載として、このような追悼記事が、家族でも同じ職場の人間でもなく、また同じ政治組織の人間でもないものによって書かれていることに着目したい。そこにはカトリック教会の意志が働いている。カトリック教会は、共和国軍側が教会に対してとった反教権主義的な行動を迫害に関して、1937年5月の段階で、司教区へのアンケートを実施する計画をたてた。このアンケートでは聖職者に関する項目が多数をしめるが、平信徒に関しては、司教区全体の死者数と、その中に宗教的思想によるものがいったい何名いるのか、その殉教にあたっての英雄的行動はどのようなものだったか、などを問うている²⁵⁾。よって、追悼記事⑦のような伝記は、当時のカトリック教会が信仰のために死亡した者を記録しようとする意図に基づいて書かれていると考えるべきであろう。

この追悼記事⑦からは、バルセナ・コルテスが聖職者になるための教育を受ける神学生であったこと、また内戦下での共和国軍による兵役召集をへて、工兵大隊へ配置され、1937年1月に死亡したことがわかる。また、彼が逃亡兵

24) *El Diario Montañés*, núm. 11356, 22 de febrero de 1938, p. 6. “Galerías de nuestros mártires. Los Caidos por Dios y por la Patria. Don Fernando Bárcena Cortés. Nació en San Román de Llanilla, el 24 de julio de 1914. Desde los trece años a los 18 estuvo estudiando con aprovechamiento en el Seminario de Corbán (Santander). Cuando llamaron la quinta del 34, a la que pertenecía, debido a protestas por exención física, fué a prestar servicios en una oficina; pero por una denuncia en que se le acusaba de ser fascista fué destinado al batallón de zapadores minadores que mandaba el capitán Benito González. Este batallón salió de Santander el 30 de noviembre de 1936 con destino a Villanueva de la Nía y allí permaneció Fernando hasta el día 2 de enero, fecha de su asesinato.”

25) Andrés-Gallego, J., Pazos, Antón M. (eds.) *Archivo Gomá. Documentos de la Guerra Civil, vol. 5, Abril-Mayo de 1937*, Madrid, CSIC, 2003, pp. 324-329.

となった可能性を否定する表現も盛り込まれていることに注目したい。なお、死亡広告⑥と追悼記事⑦の間には、死亡の日時に1日の違いがある。家族の死亡日時に関する情報の方が的確であるべきであり、追悼記事⑦で使用されたレトリックは、死の日付の正確さを求めるというよりは、あるよきカトリック青年平信徒が「殉教者」として死を迎えるまでの状況を物語として描くことに特化していると考えられることもできる。

2-4. フェルナンド・バルセナ・コルテスの内戦下の歩みを補完するために

共和国軍側の秘密警察は、バルセナ・コルテスを「伝統主義者 (Tradicionalista)」の青年として分類した。その一方で、彼に関しては、その他の政治的活動に関する記述はみられない²⁶⁾。「物理的な兵役免除」という表現が意味するように、神学生として特別な形で徴兵されていたバルセナ・コルテスであった。その事実が共和国軍内で周囲に漏れた後は、教会に近い人間として非難や暴力を受け、抑圧された状態におかれていたはずである。また工兵大隊下にあるサンタンデル民兵の鉄道部門に配属されてからは²⁷⁾、常に周囲の人々による監視下に置かれていたと考えられよう。追悼記事⑦にある「フェルナンドは殺害された1月2日まで、そこに留まった。」という表現からは、実際に果たして彼が共和国軍からの逃亡を試みたのか、秘密裏に連行されて殺害されたのか、つまり、死がどのように彼に訪れたのかを読みとることはできない。一方で、彼に近い人々にとっては、このような彼の死は「マルクス主義者の暴徒らによってあさましくも」もたらされたものであった。またこうした、「不正で邪悪な」共和国軍側が人々を殺害したのだという意識は、戦後もずっと社会に残存したのである。たとえば、1994年には『われらのスペイン解放のための聖戦に

26) Centro Documental de la Memoria Histórica (CDMH). Santander. OIPA, Carpeta 4, Folio 542. 伝統主義者とは王党派の一派であるカルリスタの系譜を引く右派であり、同じ右派であってもファランヘとは異なる思考体系を持っている。

27) CDMH. Soldado del Batallón de Zapadores. Sección Ferrocarriles de las Milicias de Santander, Legajo 271, Expediente 11, Folio 135. 彼の部隊への所属を証明する書類には、ベニト・ゴンサレス・アセドの署名と1936年11月15日の日付が入っている。

おける山の殉教者たち、1936-1937年』という書籍が出版されているが、その表現には、明らかに追悼記事⑦を踏襲した箇所を見つけることができる²⁸⁾。この書籍はサンタンデルにおける内戦死亡者のうち200名ほどの人生を語るが、追悼記事⑧に見られるとおり、バルセナ・コルテスもそのうちの1人となっている。

追悼記事⑧

「フェルナンド・バルセナ・コルテス、サン・ロマン・デ・ラ・リャニーリャに1914年7月24日に生まれる。サン・ロマン・デ・ラ・リャニーリャのカトリック青年会メンバー。彼が属する34年の新兵グループが召集されると、物理的な免除によって、ある事務所で奉仕活動を行った。しかし彼が右派であるという密告によりベニト・ゴンサレス大尉が指揮を取る工兵大隊へと送られた。この大隊はサンタンデルを1936年11月30日に立出し、ピリャヌエバ・デ・ラ・ニアに向かい、フェルナンド・バルセナは大隊の赤どもによって殺害される1937年1月2日までそこに留まった。」²⁹⁾

1938年に出された追悼記事⑦においても1994年に出された追悼記事⑧においても、バルセナ・コルテスのもっていた政治思想や、彼に関する具体的な政治的立場への言及はない。一方、共和国軍側が残した史料からは、共和国軍側がバルセナ・コルテスの日常的な行動から、彼の中に伝統主義という政治性を見いだしたことがみてとれる。また家族による死亡広告⑥にみられる「スペインよ、立て！」という表現の容認は、家族内にあるファランヘを受容する

28) Lama Ruiz-Escajadillo, Fernando de la, *Mártires de la montaña en nuestra Cruzada española de liberación, 1936-1937*, Santander, Imprenta Sanara, 1994.

29) *Ibid.*, pp. 31-32. “Bárcena Cortés, Fernando, nació en San Román de la Llanilla el 24 de julio de 1914. Era miembro de la Juventud Católica de San Román de la Llanilla. Cuando llamaron la quinta del 34, a la que pertenecía, y debido a alegar por exención física, fue a prestar servicio en una oficina; pero por una denuncia en que se le acusaba de ser de derechas, fue destinado al batallón de zapadores minadores que mandaba el capitán Benito González. Este batallón salió de Santander el 30 de noviembre de 1936 con destino a Villanueva de la Nía, y allí permaneció Fernando Bárcena hasta el día 2 de enero de 1937, fecha en que fue asesinado por los rojos del batallón.”

思考の現れと理解することもできよう³⁰⁾。少なくとも、死亡広告⑥、追悼記事⑦、追悼記事⑧では、発行年月にみられる50年弱の違いにもかかわらず、全てにおいて敵である共和国軍側を赤と呼び、非難している。

このような例は特殊なのだろうか。では次に、バルセナ・コルテスと同様にサンタンデルの出身であるガロ・パハレス・カノについて考察する。共和国軍に召集されそのシステムの中で弾圧を受けたと思われる個人の社会的背景や政治思想が、死亡広告の文言に反映されている一例である。

2-5. ガロ・パハレス・カノ (Galo Pajares Cano, 1914-1936) の死亡広告から

死亡広告⑨

「青年ガロ・パハレス・カノ (ファランヘ・エスパニョーラ所属), 22歳。神と祖国の敵によって、1936年11月初旬に殺害された。安らかに憩わんことを。両親、父ニカノル・パハレス (E.ペレス・デ・モリーノ家の従業員) と母ソレダド・カノ、姉妹マティルデ、トゥラ、エミリア、義兄ホセ・カノ、叔父・叔母フロレンティーノ (不在)、フランシスコ・パハレス (市の警官)、ホアキナ、アスンシオンそしてフランシスコ・カノ (不在)、その他家族、そして同僚のヘスス・グティエレスは、彼の生前の旧交に対し、彼のための祈りを、また5日金曜日午前10時30分に聖フランシスコ教区教会 (学校) でとり行われる彼の永眠のための葬儀への出席を願う。サンタンデル、1937年11月3日。」³¹⁾

30) 類似する死亡広告が多数存在することは既に指摘したとおりであるが、現在手元に収集してある150人分ほどの『日刊サンタンデル』に掲載された死亡広告のなかで「スペインよ、立て!」の表現が使用されているのは10人分に満たない。この点からも、この用語の使用自体が死者もしくはその家族のファランヘとの関わりからわかることは明らかである。

31) *El Diario Montañés*, núm. 11261, 3 de noviembre de 1937, p. 1. “El Joven Galo Pajares Cano. (de Falange Española) de 22 años de edad. Fue asesinado por los enemigos de Dios y de la Patria en los primeros días de noviembre de 1936. R.I.P. Sus padres Nicanor Pajares (empleado de la Casa E. Pérez de Molino) y Soledad Cano; sus hermanas Matilde, Tula y Emilia; hermano político José Cano; tíos Florentino (ausente) y Francisco Pajares (guardia municipal); Joaquina, Asunción y Francisco Cano (ausentes); tíos políticos y demás familia, y su socio Jesús Gutiérrez, Ruegan a sus amigos le tengan presente en sus oraciones y asistan a los funerales que, por su eterno descanso, se celebrarán el viernes día 5, a las diez y media de la mañana, en la parroquia de San Francisco (Colegio de la Enseñanza). Santander, 3 de noviembre de 1937.”

この家族による死亡広告⑨では、パハレス・カノがファランへのメンバーであったことが文頭に記されている。それに対してカトリック教会の関連団体への所属に関する言及はまったくない³²⁾。また家族の職業に具体的な記載があるため、本人のみならず家系としての社会層がわかることが特徴的である。また叔父フロレンティーノとフランシスコには「(不在)」の記載があるが、不在理由に関しては、戦闘に出て不在なのか；捕らわれの身で不在なのか、詳細は記事からは読み取れない。

では次に、1937年12月、『日刊サンタンデル』に掲載された追悼記事を挙げる。

追悼記事⑩

「我々の殉教者のギャラリー。神と祖国のために死んだ戦死者。ガロ・パハレス・カノ氏。1914年9月23日サンタンデルに生まれた。まずサレジオ会の学校で教育を受け、その後経営の専門課程で学んだのち、ベルナルド・オルティス氏の公証人事務所に入り、最終的にはサンタンデルの行政書士として独立した。栄光のモビミアント以前に古きファランへに入り、ファランへとしての自覚を監獄で確認した。サンタンデルにおける赤の支配からの解放が失敗した後、エランディオ（ビルバオ）に逃れたが、1936年11月5日、そこでサンタンデルの警察に逮捕された。サンタンデルに移送され、ネイラの『チェカ』に閉じ込められたが、同夜、永遠に姿を消した。」³³⁾

32) パハレス・カノのアクション・カトリカ青年部への所属は、以下の文献の記述によって明らかである。Signo, núm. 21, 27 de marzo de 1938, p. 2; *Ibid.*, núm.29, 25 de julio de 1938, p. 10.

33) *El Diario Montañés*, núm.11288, 4 de diciembre de 1937, p. 8. “Galería de nuestros mártires. Los caídos por Dios y por la Patria. Don Galo Pajares Cano. Nació en Santander el día 23 de septiembre de 1914. Educado primeramente en el Colegio de los Salesianos, cursó luego la carrera de Comercio, e ingresó después de la Notaría de don Bernardo Ortiz, estableciéndose finalmente como Gestor administrativo en esta ciudad. Ingresó en la antigua Falange antes del Glorioso Movimiento, revalidando con la cárcel sus sentimientos. Fracasada la posible emancipación de Santander del dominio rojo, huyó a Erandio (Bilbao), en donde fue detenido por la Policía santanderina el día 5 de noviembre de 1936. Se le trasladó a Santander y quedó encerrado en al “checa” de Neila, pero de ella desapareció para siempre aquella misma noche.”

社会的な観点からみると、家族による死亡記事⑨よりも追悼記事⑩の方が、パハレス・カノの人生の歩みをより詳細に記している。この記事からは彼がサレジオ会が経営する学校で中等教育までを受けていたこと、また内戦勃発時には行政書士として身を律しようとしていたことがわかる。また投獄されてもめげない、ファランへの理想に燃えた青年であったと評されているが、むしろこれはレトリックであると考えるべきであろう。実際の収監中に彼がどのような日々を送ったかは不明である。

殺害された日時や状況についても触れ、フランコ軍側によるサンタンデルの制圧が失敗した後、バスク地方ビルバオ近郊のエランディオまで逃れたが、1936年11月に逮捕され、再びサンタンデルに移送されたと説明している。共和国軍側の秘密警察長であったマヌエル・ネイラの名を冠して呼ばれたサンタンデルの「チェカ」、つまり共和国軍側の監獄に入れられたが、死亡までの足取りは不明であるとして、裁判を受けることなく殺害された可能性を示唆している。

2-6. ガロ・パハレス・カノの内戦下の歩みを補完するために

バルセナ・コルテス同様、パハレス・カノの場合も、共和国軍側の秘密警察は、彼を「伝統主義者」の青年として分類した³⁴⁾。しかし、それ以上の情報も警察はつかんでいた。19歳、公証人オルティス氏の事務官など、彼の年齢や職業を記載したファランへのメンバーとしてのカードには、サンタンデル市警察やマヌエル・ネイラの印が押されている。この印はまさに、ファランヘが保管していたメンバーのデータを共和国軍側の警察組織が押収し、彼らを連行するために使用したことを物語る³⁵⁾。

また、パハレス・カノについては、サンタンデルがフランコ軍の支配下に入ってから行われた「スペインにおける赤の支配についての検察庁による予審一般訴訟（以下『一般訴訟』と略記）」の文書にも言及を見つけることができる。

34) CDMH. Santander. OIPA, Carpeta 4, Folio 523.

35) CDMH. Santander. OIPA. Carpeta 4, Folio 330.

「一般訴訟」とは、フランコ独裁体制が内戦下における犯罪を彼らの論理で裁くために全国でおこなった予審訴訟の名称である。公式には1940年4月26日の政令で設置されているが、すでにそれ以前に、証拠の収集手続きは始まっていた。以下に見るように、サンタンデルのケースは、早期に手続きが開始された一例である³⁶⁾。

例えば、1938年1月20日には、サンタンデルの聖フランシスコ教区教会の主任司祭代理が、教区が受けた被害について宣誓証言している。彼は内戦で亡くなった同僚の聖職者に言及した後、教区平信徒の人材喪失を訴え、同教区教会に属していた教区民で「姿を消した」人々の名を挙げていった。パハレス・カノはそのうちの1人であったのである³⁷⁾。

また、パハレス・カノは『われらのスペイン解放のための聖戦における山の殉教者たち、1936-1937年』の中で取りあげられている。(追悼記事⑪)

追悼記事⑪

「パハレス・カノ、ガロ。1914年9月23日サンタンデル生まれ。ファランへに所属した。赤色ソヴィエトのアナーキズムからのサンタンデルの解放が失敗し、ビルバオ県のエランディオへ逃亡したが、そこで赤の警察によって1936年11月5日に逮捕された。同警察によりサンタンデルへ移送され、ネイアのチェカに閉じ込められた、そしてそこから同夜、永遠に姿を消した。」³⁸⁾

- 36) 「一般訴訟」は書籍としてフランコ独裁体制下での1943年に刊行された。この書籍は再版を重ね、また英語訳も出版されて、共和国軍が行った行為を蛮行として国内外に宣伝する役割も果たした。Ministerio de Justicia (ed.), *Causa General. La dominación roja en España*, Madrid, Ministerio de Justicia, 1943. 英語訳は以下を参照されたい。Notes for the Spanish History, 1936-1939, Madrid, Gráficas Aragón, 1953.
- 37) Archivo Histórico Nacional. Causa General. Pieza Principal. Caja 1582-2. Expediente 4, p. 65. ここでは教区民の当時の住所も記されており、教会と平信徒との間の距離の近さがうかがえる。パハレス・カノはビスタ・アレグレ通り8番地 (c/Vista Alegre 8, 1º) に居住していた。
- 38) Lama Ruiz-Escajadillo, F., *op. cit.*, p. 144. “Pajares Cano, Galo, nació en Santander el 23 sep 1914. Estaba afiliado a FE. Fracasada la posible emancipación de Santander del anarquismo rojo-soviético, huyó a Erandio, provincia de Bilbao, en donde fue detenido por la policía roja el 5 de noviembre de 1936. Fue por dicha policía roja, conducido a Santander y quedó encerrado en la checa de Neila, y de ella, para siempre aquella misma noche.”

この記事にも、『日刊サンタンデー』に掲載された追悼記事⑩を下地にした記述がみられる。ただし、追悼記事⑩で記されている、パハレス・カノが抱いていた旧来からのファランヘとしての誇りや組織への忠誠心のニュアンスは消え、メンバーであったことだけがわかるように書かれている。ファランヘという、スペインのファシストと評された党へ傾斜した、極端に政治化した人物として描写することを避けた可能性が大きい。またここではアナーキズムもコミニズムも全て「同質」に記されている。

ところで、書籍『われらのスペイン解放のための聖戦における山の殉教者たち、1936-1937年』のタイトルに使用されている「解放」「聖戦」「殉教者」といった単語からは、スペイン内戦に遠い昔のイスラム教徒からの解放戦争における祖先たちの経験を重ね見る視線、内戦を聖戦として、フランコ軍によってカトリックの正義がもたらされた戦争として評価する姿勢を読み取ることができよう。戦後50年あまりたって、なぜこういった現代の殉教者伝ともいえるような書籍が出版されたのだろうか。その理由を考えるにあたって、ひとつにはローマ教皇ヨハネ・パウロ2世によって1980年代後半以降再び促進されるようになった列福・列聖運動との関係を指摘しなければならないだろう。確かに、前述の書籍の中に挙げられている人々全てが列福・列聖の対象となるわけではない。というのも殉教者としての列福・列聖を受けるには、カトリック信徒であるという、ただそれだけの理由で殺害されたことが第一条件としてあるため、政治性の強い活動を行った人間は除外される可能性が高いからである³⁹⁾。ファランヘでの活動は、明らかに政治的事象に属するため、殉教者として列福・列聖されるには資格を満たしていないという判断につながりうるので、その点についてはゆるやかに書いてあるという理解も可能である。

39) スペイン内戦期のカトリック平信徒が後に殉教者として列聖・列福された例に関しては、渡邊千秋「殉教者をめぐる史学研究上の論点整理の試み—日本とスペインのいくつかの事例から」『専修大学人文科学研究月報』243号、2010年、1-12頁を参照されたい。

おわりに

死亡広告は、ある人物の死亡を知らせるという基本的な役割とともに、その人物の人生を世間に知らしめる役割をも果たした。「無名」の人々の死は、新聞に死亡広告が掲載され、それが読まれることによって、家族内で記憶される出来事とは別の文脈を持つこととなった。死亡広告というメディアによって、その人が死亡したという現実が公開・記録されるとともに、その死は社会的なものとなり、またその死に対する政治的な意義づけも行われる。そして、死者に対して捧げられた追悼記事は、時間がどれだけ経過してから書かれていようとも、死を招いた原因であるスペイン内戦を人々の心の奥底に眠った記憶からよみがえらせる。また、それと同時に、追悼記事に記されたその死は、記事を読む人々に新たに受容され、形を変えて再び構築されていったのである。

本稿でとりあげたのはフランコ陣営側で書かれた死亡記事である。では、他方、共和国陣営を支持した人々は近い人の死をどう昇華させたのであろうか。その過程で、宗教的な要素はどの程度みられたのだろうか。果たしてフランコ陣営で起こったのと同等のことが起きていたのだろうか。問いは尽きない。

「内戦」をどう語り継ぐのか。すべての出来事は忘却される運命にあるのかもしれない。また個人レベルの事象に目をむける方法は、時代の全体像をとらえようとする歴史家の仕事にはなじまないともいえる。しかし、一人の人間の人生が他の誰の人生とも差し替えることのできない唯一絶対のものであるかぎり、ミクロな世界の存在を考慮することは、「内戦」を語り継ぐ上での必須事項ではないかとも思われる。スペイン内戦は戦後70年を経た現在でも語り継がれている歴史的事件である。現在でもスペイン人にとっての「あの戦争」とはスペイン内戦であり続けている。しかし当時の党派性が残した傷跡を、どうすればできるかぎり客観的に分析し、理解することができるのだろうか。未だ、歴史学はその困難を乗り越えてはいない。

史料の発見は終わり、内戦は語りつくされたようにみえても、本稿で例としてみた死亡広告が示すように、実際にはまだ豊富な情報を持ちながら十分に使用されていない史料も多い。現代史の資史料が豊富である、というのはあなが

ち嘘ではないが、その反面、だからこそ使用されないまま眠る資史料も多いことを私たちは肝に銘じねばならない。スペイン内戦史には常に補完や書き直しの可能性が秘められていることを忘れてはならないだろう。

本論稿は平成 22 年度科学研究費補助金「宗教と国家：スペインにおける戦争犠牲者の
祈念をめぐる一考察（課題番号 21510269）による成果の一部である。